

## 物質代謝史観と連帯とにもとづく脱資本主義への途

尾関周二『21世紀の変革思想へ向けて——環境・農・デジタルの視点から——』  
(本の泉社、2021年)に寄せて

A Path to Decapitalism based on the Historical View of 'Stoffwechsel' and on Solidarity  
(A Review of S. Ozeki's *Toward a Reformative Thought in the 21st Century*)

水野 邦彦  
MIZUNO Kunihiko

「社会主義は自転車で到来する」という印象的なエピグラフが附されたイヴァン=イリイチ『エネルギーと公正』(晶文社)は1979年に日本語訳された。イリイチがさかんに用いた〈convivial〉という言葉は、この本では自律共働的と訳され、産業的生産性と逆のもの、すなわち〈人間相互間の自律的で創造的な交わり〉〈人間と環境との交わり〉を意味した。翌年にはアンドレ=ゴルツ『エコロジスト宣言』(技術と人間、のち緑風出版)が上梓され、「エコロジズムは、市民社会の反逆と、その再建の運動を体現する」ことなどが論じられた。当時ある種の新鮮な印象をあたえたこれらの書物をも思い起こさせるような、社会の変革とエコロジーとを一体のものとしてとらえる著作が、ここで取りあげる尾関周二『21世紀の変革思想へ向けて』である(以下、本書の該当頁を示す)。本書で著者は「革新的な左派の運動とエコロジズムと」(24頁)の分断を克服する社会理論を目指し、いわゆる自然中心主義的環境思想とはちがって、社会を変革する「社会理論的な概念装置」(72頁)が環境思想の枠組としても不可欠であることを強調する。

環境問題の受けとめかたが、第1段階の公害問題、第2段階の地球環境問題をへて、生命や人間や現代文明の根源的危機を見据えた環境問題の内面化・哲学思想化という第3段階に移行してきた(尾関周二編『環境哲学の探求』大月書店、9頁をみよ)とすれば、著者は当初から第3段階に立っていたといえる。著者も、イリイチやゴルツも、たんに自然環境を論ずるのではなく、人間や社会と自然環境とのかかわりを論じ、あるいは自然環境をめぐる人間社会の軋轢を主題的に論ずる。そして環境思想を俎上にのぼすさいにも、むしろ人間のありかた、社会のありかたを批判的に論じ、それらの変革を主張するのである。

### I 〈人間と自然の物質代謝〉と〈物質代謝史観〉

本書の変革思想を支える根柢の概念は〈人間と自然の物質代謝〉である。

物質代謝の視点は19世紀の何人かの自然科学者にみられたが、著者は、とりわけリービッチおよびフラーの著作に大きな関心を寄せたマルクスが〈人間と自然の物質代謝〉を「生態学的意味を含む社会理論的概念」(29頁)としてみずからの理論に組みこもうとしたことを重視する。マルクスはすでに若いころに「社会は人間と自然との本質的統一の完成態であり……人間の自然主義ならびに自然の人間主義それぞれの完成態である」(マルクス『パリ手稿』=『経哲草稿』山中隆次訳、御茶の水書房、135-136頁)と書きつけていたが、のちに自然科学の知見を得てそれを深め、〈人間と自然の物質代謝〉概念に踏み出したといえる。

そして著者は、資本主義的生産が持続的な土壌の肥沃度の永久的自然条件を攪乱するとともに人間と土地とのあいだの物質代謝を攪乱することが論じられた『資本論』第I部に著目し、〈人間と自然の物質代謝〉を資本主義批判へと振り向けてゆく。資本主義は物質代謝を制禦しえないのであり、それどころか「生命的な自然循環に基づく物質代謝の分裂・攪乱」(101頁)を惹起すると述べる著者は、さらに「環境問題と人間の心身の破壊はその根っこにおいて共通性がある」(86頁)として、資本主義が人間の心身を破壊しつつけていることを指摘する。この論点に著者はいち早く『現代コミュニケーションと共生・共同』(青木書店、1995年)で著目し、コミュニケーションと人間-自然関係を重ねるようにして論じていたが、あらためて「エコロジーとコミュニケーションの問題は深く連関している」(86頁)ことが本書で述べられる。

従前より史的唯物論もしくはマルクス主義においては「生産力を歴史発展の究極的な動因とする歴史観」(115頁)たる〈生産力史観〉が理論的基盤に据えられてきたが、〈生産力史観〉には「生産力(また、生産

関係)と自然生態系との矛盾がもつ重大な意味はほとんど視野に入ってこなかった(113頁)と著者はいう。こうして「生産力史観を相対化」(29頁)しつつ、「生産力史観」をみずからのうちに埋めこみうる歴史観として提起されるのが〈物質代謝史観〉である。〈物質代謝史観〉は、『人間と自然の物質代謝』概念を歴史発展の基底に位置付けて人類史と未来社会を捉えるカテゴリー(116頁)であり、生活過程・生命過程を「自然と生命の循環の中に位置づける」(118頁)歴史観である。生活過程は人間社会の基礎であるゆえ、〈物質代謝史観〉によって「人類誕生から未来社会に至る人類史全体」(123頁)が描かれうる。〈物質代謝史観〉によると、人類史の劃期をなしたのものとして、狩猟採集時代における「狩られるヒト(Hunted)から狩るヒト(Hunter)へ」(同)の転換、農業革命、産業(工業)革命、エコロジー革命=コミュニズム革命、の4つが挙げられる。さいごのエコロジー革命=コミュニズム革命は「自然主義=人間主義」(124頁)がなしとげられる革命であるという。

附言すると、著者は生産力上昇や〈生産力史観〉を否定するのではなく、より根柢的な視野に立ち、正常で健全な物質代謝が確保されるべきことを主張する。そして、〈生産力史観〉をとりこみ、生産力-生産関係をもふくむ「さらに包括的な基礎的カテゴリー」(116頁)として、〈人間と自然の物質代謝〉を歴史発展の基底に据える〈物質代謝史観〉を提唱するのである。

## II 物質代謝の主体=共同体

〈人間と自然の物質代謝〉というさいの「人間」とは「環境適合的なあり方を追求する」(130頁)主体であるが、「社会を実体化することも、個人を原子論的に捉えることも共に否定して」(127頁)いたマルクスにとって、その主体たる人間は「社会的個人」(同)であり、「社会」(同)でもあった。物質代謝をおこなう主体は、狩猟採集時代には家族・部族などの小規模共同体であり、農業革命後には民族であり、近代の資本主義のもとでは国民国家(nation-state)と国民(nation)とであって、これらの主体はいずれも大枠では人間社会であり〈共同体〉であると著者はいう。マルクスのいう〈共同体〉にかんしては渡辺憲正『『経済学批判要綱』の共同体/共同社会論』(『経済系』第223集、2005年)に精緻で劃期的な分析があり、委細そちらに譲らざるをえないが、この分析をふまえて著者は共同体を物質代謝の主体とみなす。こうしてマルクスは『物質代謝』概念を社会的次元にまで拡大した(131頁)と評価されるのである。

著者は〈生産力史観〉を離れて、マルクスの〈社会構成体〉概念をもとに「生活過程の基底にある深層の集合的意識」(152頁)に目を向け、その集合的意識において人類史をとらえる。そうして狩猟採集時代の平等、農業革命以降の階級社会などをみると、それらの「生活過程の深層には変容されつつも共同体意識が連続している」(153頁)ことがわかり、世界史のなかで形成されてきた階級意識や民族意識は「生活過程(物質代謝過程)の生活意識に根柢をもつ」(160頁)と著者は考えるにいたる。物質代謝の主体は、古代国家においては帝国内の村落共同体・都市共同体の総体、近代国民国家においては主体化した資本主義システムであり、この資本主義的近代のもとでは「物質代謝が物象化された様式で」(173頁)おこなわれる。これらにたいし、マルクスの考える未来社会もしくはコミュニズム(共同体)主義においては「諸々のアソシエイトされたコミュニズムの連合・ネットワークが物質代謝の主体となる」(同)。こうして変革の向かう先としてアソシエーションが示唆されるのである。

## III 労農アソシエーション

マルクスの社会理論にかんして従来しばしばアソシエーションが論じられてきたものであるが、ここで著者は労働者と農民との新たな連帯を〈労農アソシエーション〉として構想する。そのさい著者が論拠とするのはマルクス晩年の「ザスーリチへの手紙」およびその草稿群である。つぎのようにマルクスはしるしている。

「ヨーロッパでただ一つ、ロシアの共同体は、いまなお、広大な帝国の農村生活の支配的な形態である。土地の共同所有が、それに集団的領有の自然的基礎を提供しており、またその歴史的環境、すなわちそれが資本主義的生産と同時に存在しているという事情が、大規模に組織された協同労働の物質的諸条件を、すっかりできあがったかたちでそれに提供している。それゆえ、それは、カウディナのくびき門を通ることなしに、資本主義制度によってつくりあげられた肯定的な諸成果をみずからのなかに組み入れることができるのである。」(『マルクス=エンゲルス全集』第19巻、大月書店、1968年、408頁)

これは「農村生活」についての記述であるし、また手紙の最初の草稿には「ロシアの『農村共同体』は、資本主義的生産と同時に存在するという事情が集団労働のすべての(物質的)条件をそれに提供するような歴史的環境のなかに、おかれているのである」(同395頁)という句が残っていることから、ここでマ

ルクスの脳裡にあった共同体はあきらかに農村共同体ないし農業共同体であろう。そしてロシアのこのような農業共同体が「ロシア社会再生の要素」(同 387 頁)、「ロシアにおける社会的再生の拠点」(同 239 頁)になると評価される。

このような草稿をもとに、著者はマルクスが「農業共同体を解体し産業革命を経て資本主義的工業社会を実現した後に」(181 頁) 社会主義・共産主義に向かうという、イギリスなどで想定される道のほかに、ロシアのように「既存の農業共同体から共産主義に至る道」(同) を考えていたことを肯定的に引き出す。ここには、ふたつのことがふくまれている。ひとつは、歴史がみな一様に、単線的に発展するのではなく、複線的にすすんでゆくことである。いまひとつは、マルクスが社会的再生の拠点と評価したロシアの農業共同体・ミールのうちに、労働者階級と「小農との同盟」(同) に向かう可能性、「労働者と農民の新たな連帯」(180 頁) に向かう可能性がみいだされることである。著者によれば「小農(自作農)は……土地という生産手段を所有しているので、賃労働者=プロレタリアートではないが、しかしまた、賃労働者をやとって搾取しているわけでもなく……他人を搾取しないで自らの生計のために自らの労働で生きている点では、広義の『労働者』と規定しうるように思われる」(200 頁)。こうして労働者と農民との同盟や連帯を著者は構想し、それによって「現代日本の企業労働者の危機と農業者の危機を克服」(193 頁) し、もって「対米従属のもとに財界の利益を追求する政権に対する大きな抵抗勢力を形成する」(193-194 頁) ことが課題であるという。

マルクスの「労働者が自分の生産手段を私有しているということは小経営の基礎であり、小経営は、社会的生産と労働者自身の自由な個性との発展のために必要な一つの条件である」(『マルクス=エンゲルス全集』第 23 巻、大月書店、1965 年、993 頁) という記述にもとづき、著者は小農や手工業者を肯定的に評価するとともに、労働者兼農民・半労半農、農民兼労働者・半農半労などの「中間者、媒介者」(202 頁) も変革思想を構想するうえで重視する。さらに著者は労働者と農民との連帯というにとどまらず、「都市民と農民の連帯」(206 頁) をも視野に収めた幅広い連帯ないし同盟を〈労農アソシエーション〉と呼び、これが社会変革の原動力となることを期待する。

#### IV 工業と農業

〈人間と自然の物質代謝〉の様式に著者は物質代謝様式という略称を附し、人類史上の「『物質代謝様式』

の大転換」(120 頁) として、いまから 1 万年前に起こった農業革命と、300 年前に起こった産業(工業)革命とを挙げる。この大転換の重みは、著者のいうとおり、くりかえし強調するに値するであろう。

農業革命においては、たとえば「里山」のように、自然循環に位置づけられる「人間化された自然の形」(同) がつくられ、そこで人間はいわば自然と共生するありかたを身につけたといえる。ところが産業(工業)革命は、生産力を高めるために「自然循環から切り離された化石燃料を利用し、大量の人間を土地(自然)から切り離し都市に集中する過程」(121 頁) であったと著者はいう。この過程は、人間が商品交換や資本の論理に巻き込まれるというのみならず、〈人間と自然の物質代謝〉を攪乱し、そこに亀裂をもたらすものであった。

資本主義的近代は、農業より工業が重視されてこそ成し遂げられたといえるであろう。けれども、中島紀一『有機農業の技術とは何か』(農文協、2013 年、147 頁) によれば、工業は「ほぼ人為の世界として完結して」おり、そこでは「自然は資源として、いわば客体として、その過程に投入され」、「資源収奪—大量生産—大量消費—大量廃棄」がひたすら推進される。これにたいし農業においては本来「自然自体の生産力」「循環と共生の生産力」、人為と自然との相互連関における「共生的な生産力」が生かされる。この把握をふまえ、著者は、〈工〉的技術とは「自然の一部を素材として人間の目的実現のために加工・製造などによって働きかける技術」(240 頁)、〈農〉的技術とは「環境を考慮して生命体や生態系に人間の生存維持を目的として働きかける技術」(同) であり、そして両者を補助するのが〈情報〉的技術であると位置づける。この〈情報〉的技術にコミュニケーションがふくまれるというところには、言語論やコミュニケーション論を切り拓いてきた著者の持ち味が発揮されている。

人工知能や IT など、デジタル革命にかかわるものをも、著者は積極的にみずからの変革構想に取りこむ。「デジタル情報技術によって現在の生活様式の変革を通じて地球生態系の自然循環に定位させる物質代謝様式を実現し……自由・平等・友愛の社会へ向けて」

(340-341 頁) 変革をすすめてゆくべきことを著者は主張し、その社会を〈共生型持続可能社会〉(共生持続社会)と呼ぶとともに、それは〈農工デジタル社会〉でもあるという。この社会においてこそ「自己確証的な労働・活動」(341 頁) が可能になると著者は見通す。

著者は、労働には「社会的共同性における各人の自己確証のあり方」(219 頁) が求められるべきこと、労

働のあり方が「自己確証につながる」(同) べきことを述べたのち、一步すすめて、「賃労働のような資本主義的生産のシステムによって拘束された労働から部分的・全面的に解放されること」(331 頁)が「自己確証的な労働」(337 頁)・「自己確証的な活動」(331 頁)につながるものとする。今日この「自己確証的な労働・活動」を現実のものとする途が〈農工デジタル社会〉にみいだされることを終章で説く。〈農工デジタル社会〉はまた、経済システムとして農村都市共生社会に重ね合わせられ、そこにおいて「コミュニティ(共同体)的発想とアソシエーション(協同組合)的発想の結合」(341 頁)が目指されるという。

### むすびにかえて

本書では、地球環境、農業、労働、さらに I T ・ A I などデジタル技術が取りあげられつつ、それらの根柢に人類史を貫いてみいだせる〈人間と自然の物質代謝〉が第一の焦点となった。そのほかに〈物質代謝史観〉〈労農アソシエーション〉〈農工デジタル社会〉、ここでは割愛せざるを得なかった〈個人的-社会的所有〉というような、重みのある概念が呈示され、それらが有機的に結びついて、今日めざすべき〈変革思想〉が論じられたのである。

本書にあらわれた著者の姿は、たんなる哲学研究者でも、たんなる環境思想研究者でも、たんなる情報コミュニケーション研究者でもなく、それらを包括する人間=社会理論の探求者である。その探求の基盤をなすのはマルクスの理論、とりわけ〈人間と自然の物質代謝〉の理論であり、この探求の向かう先は、社会の変革である。

変革されるべき社会は、人間が否応なくかかわる社会、人間存在の土台となる社会である。その意味で社会変革の探求において必然的に人間観・人間論が問われることになる。著者は『言語と人間』(大月書店、1983 年)の上梓を起点としても 40 年近く、社会とかかわる人間論に取りくんできた。〈人間と自然の物質代謝〉や労働における自己確証は、いちはやく『言語的コミュニケーションと労働の弁証法』(同、1989 年)で取りあげられているし、『遊びと生活の哲学』(同、1992 年)の基調をなすのは、人間の自己確証、マルクスふうにいえば〈個性性の確証〉であるように思われる。著者はこうして研究生活全般にわたり、斯界の常識にとらわれず独創的な知見を呈示し、人間=社会思想の幅と奥行きとを広げてきたが、その現時点における一集成が本書である。著者の視角は現実感覚にあふれ、論点は広汎、姿勢は柔軟で懐が深く、それでいて核心部

分は 40 年の間ほとんどぶれることなく堅固である。蓄積された立体的な人間=社会思想が本書によって脱資本主義に向かう変革思想へと収斂されている。